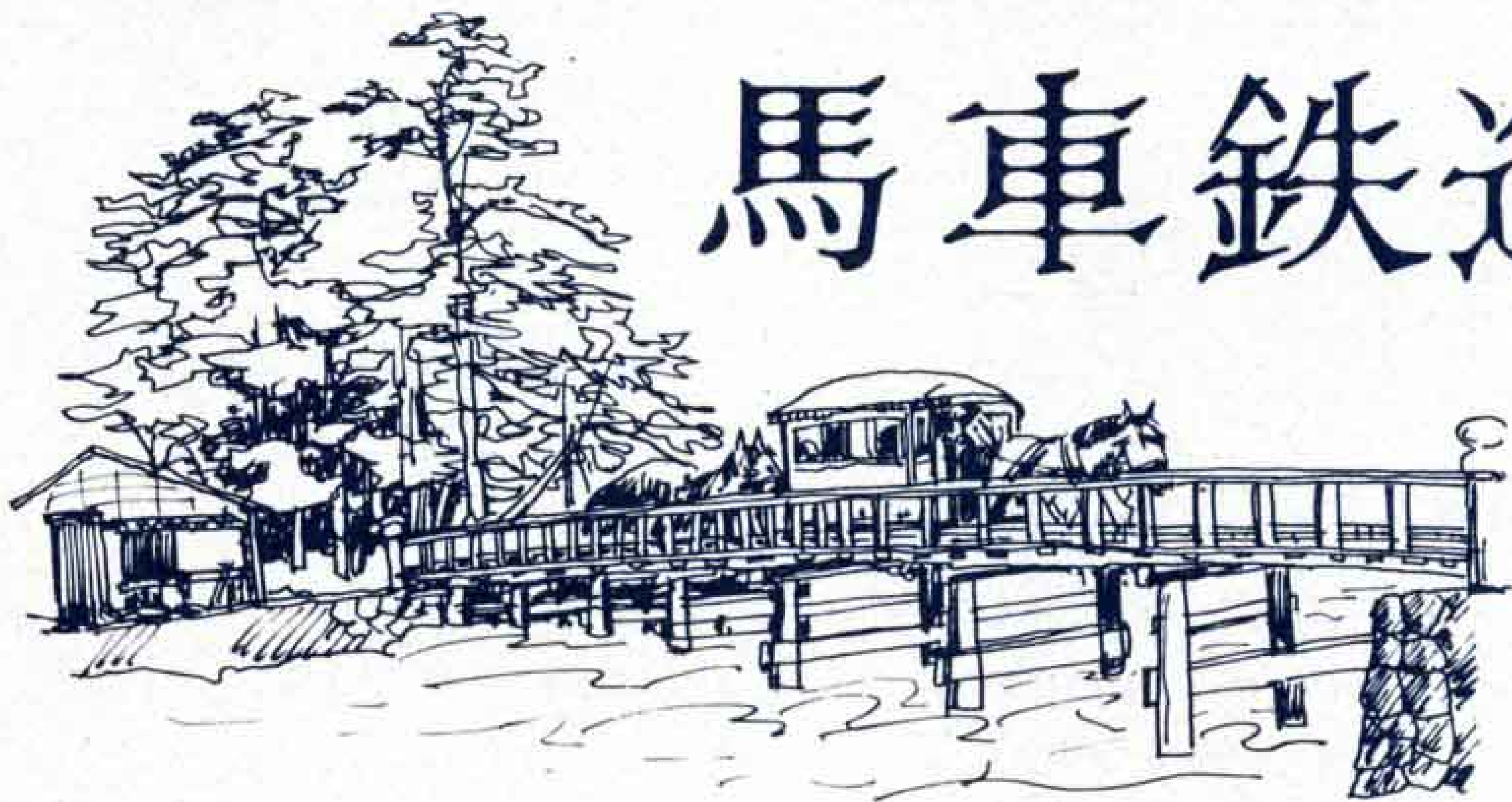


ふるさとのお話

馬車鉄道



明治22年東海道線鈴川駅が開駅。翌23年鈴川駅から大宮町（富士宮市）まで馬車鉄道が開通しました。

馬車鉄道は、道路に敷いた線路の上を、馬車で人や荷物を運び、当時の人々の貴重な交通機関の一つでした。

当時の最新式交通機関

鈴川駅を起点として吉原、伝法、入山瀬を經由して大宮町（現富士宮市）に至る馬車鉄道が開通したのは明治23年6月でした。

馬車鉄道とは、6人から10人ほどの客を乗せる小さな箱型の車を馬が引っぱったものです。

手綱たづなで馬あやつを操るぎよしゃ馭者べっとうを別当と呼んだそうです。

そして、ところどころに「すれ合い」と言って、馬車かが相互に行き交うために4本の軌条きじょうを敷いたところがあり、手を上げて合図をすれば、途中どこでも止めてくれる便利な乗り物だったようです。

しかし、当時の人々の重要な交通

手段であった馬車鉄道も、富士身延鉄道の開通など、文明の進歩とともに大正の末に廃止されました。

懐かしい乗り物だね

今泉に住む大古田利良さん（76歳）は「私が乗ったのは14・15歳くらいのときだったかね。」



大古田さん ちょうど人が小走りに走る速さと同じぐらいだったかね。」と語ってくれました。

新橋から鈴川の駅までたしか10銭だったかな…。

いまの自動車と比べると、とてもんびりしていたね。

ちようど人が小走りに走る速さと同じぐらいだったかね。」と語ってくれました。

地名の由来

ひのき 新田



ひのき 新田は、江戸時代には東海道の沿った農業と漁業の独立した村でした。この村が成立したのは江戸時代の早い時期で、船津新田を開発した三井氏の一族10人ほどの者が浮島沼を越えて移住してきたと伝えられています。天明年間（1780年代）の村高は18石余で、家数は12軒、人数は53人でした。「新」と呼んだ理由は不詳です。

古墳のはなし ⑥

古墳と祖先の生活



形象埴輪 同筒埴輪

埴輪(はにわ)

「埴輪」は何のためにつくられたのでしょうか？

埴輪には土管のような形をした「円筒埴輪」と人物や動物えんとうはにわまたは家などを模した「形象埴輪」があります。

「円筒埴輪」は古墳の中段付近はちまに鉢巻きのように並べて、現世と死者の世界とを区別していました。また「形象埴輪」は古墳の墳頂付近ふんちようにおかれており、死者のための従者、道具、建物の代用と考えられます。

古墳の上に並べられた石のことを「葺石」といいますが、「葺石」は古墳の土止めや、装飾のためとともに、円筒埴輪と同様に現世と死者の世界を区別するためです。

こちら編集室

ことしは空梅雨—の予報もはずれて長雨続き。大雨警報に各地で水害・土砂崩れ等に警戒の色を強めています。災害を防ぐには何よりも日ごろの心がけと備えが大切です。

編集員も雨の中を、ふだん鍛えた脚で取材に奮戦しました。